



Title	名詞修飾における「トイウ」の機能(2)-「トイウ」の意味的機能-
Author(s)	戸村, 佳代
Citation	明治大学教養論集, 242: 215-231
URL	http://hdl.handle.net/10291/12237
Rights	
Issue Date	1991-03-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

名詞修飾における「トイウ」の機能(2)

—「トイウ」の意味的機能—

戸村佳代

0. はじめに

前稿⁽¹⁾では、名詞修飾構造に現れる「トイウ」の統語的な位置づけに関わる二通りの分析について議論し、「トイウ」が実質的な意味を伴わない機能語であることを見た。しかしながら、このことは必ずしも「トイウ」の有無が文の意味になんら貢献しないということにはならない⁽²⁾。本稿では、まず、「トイウ」の介在が意味にどのような関わりを持っているかについてこれまで行われた研究に考察を加え(1. 1)、不備を指摘する(1. 2)。さらに、その代案を提示し(2. 1)、妥当性を検証することにする。

1.1. 補文の非叙実性

機能語も意味に関わりを持つということは Kiparskys (1970) 以来広く支持され、Volinger (1977) 等にも説得力のある議論が見られる。日本語においては久野(1973)で「コト」・「ノ」が叙実補文 (factive complement) を、「ト」が非叙実補文 (non-factive complement) を取ることが指摘されている。

Nakau (1973), Josephs (1976) は補文標識の「トイウ」に意味的機能を認め、「トイウ」が表面に現れた文では非叙実的になると主張している。

Nakau によれば、「嘘ダ」「間違イダ」「疑ワシイ」等の述語は、非叙実的述語 (non-factive predicate) であり、「コト」「ノ」と共起する場合には(1)で示され

(4) 太郎は、次郎が嘘をついた $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. と} \\ \text{b. *のを} \\ \text{c. *ことを} \end{array} \right\}$ 信じているが、それは間違い

だ。

(4)の主節の述語「信ジル」は「ノ」「コト」が許されないことから分かるように非叙実的述語で、「補文の命題が真であるという話者の前提(以下、「前提」と略記)」を含意しない。このことは、(4a)で「それは間違いだ」という文が自然につながることで確認できる。そこで、(4b)、(4c)と(5b)、(5c)の文法性の違いをそれぞれ比べてみると、一見、「非叙実性」説が妥当性をもっているように思われるかもしれない。

(5) 太郎は次郎が嘘をついた $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. と} \\ \text{b. ?というのを} \\ \text{c. ということを} \end{array} \right\}$ 信じているが、それは間

違いだ。

すなわち、補文の非叙実性と、「ノ」「コト」が要求する叙実性との矛盾が「トイウ」が挿入されることによって解消されているかに見えるのである。

しかし、この見方が誤りであることは、叙実的述語「知ル」を用いた(6)の文法性を観察すれば明らかである。

(6) 太郎は、次郎が嘘をついた $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. のを} \\ \text{b. ことを} \\ \text{c. というのを} \\ \text{d. ということを} \end{array} \right\}$ 知っている。

「非叙実性」説に従うとすると、(6c, d)の補文は非叙実補文で、話者はその真実性について疑いをもっていることになる。その場合、「知ル」という述語を持つ叙実性との間に矛盾がひき起こることになるはずであるが、これらの文の文法性には全く問題がない。さらに、「トイウ」によって補文が非叙実的になるわけではないという証拠に、(5)と平行的に補文に対する話者の疑いを明示的に現

(12a)は、「佐藤さんがアメリカへ行った」時の出来事や経験について話を聞いた、という内容を表している。ここでは、「佐藤さんがアメリカに行ったかどうか」が焦点になっているのではなく、「佐藤さんがアメリカに行った」ということに加えて、それに関連した一連の“ストーリー”を聞いたということの意味している。それに対して、(12b)では“ストーリー”は眼中にはなく、ただ「佐藤さんがアメリカに行ったかどうか」だけが取り上げられているのである。

この違いは、次の(13)~(14)のa, bの文法性の違いをそれぞれ観察することによって、より明らかになる。

(13) 佐藤さんがアメリカへ行った $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. } \phi \\ \text{b. ?*という} \end{array} \right\}$ 話を聞きましたが、なか

なかおもしろい話でしたよ。

(14) 佐藤さんがアメリカへ行った $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. } *\phi \\ \text{b. という} \end{array} \right\}$ 話を聞きましたが、それは

本当ですか。

(13), (14)の「話」を被修飾名詞とする名詞句は、修飾部が共通しているにもかかわらず「トイウ」の介在に関わる容認性の判断は全く逆になっている。(13a)で話者がおもしろいと感じたものは「佐藤さんがアメリカへ行った」という事実だけに限定されないというところは直感的にも明かである。「アメリカへ行った」ことにまつわるストーリーとしての「話」の総体に対して「おもしろい」という評価を与えているのである。つまり、修飾部に表された行為と時間的に並立・連続する行為・出来事などの存在を含意させているということができる。このことは、次の(15)のAの発話で「みんな」が「話」を指していることでも確かめられる。

(15) A: 佐藤さんがアメリカへ行った ϕ 話を聞きましたが、あれはみんな本当なんですか。

B: 中には本当のこともあるかもしれませんが、ほとんどは作り話なんじゃないかと思いますよ。

(15a) と異なり, (14b) で “本当かどうか” という真偽判断を求めているのは「佐藤さんがアメリカへ行った」という命題にたいするものだけに限定される。修飾部に表された行為と時間的に並立・連続する行為・出来事などは切り捨てられているのである。このことから, 「トイウ」には, 修飾部に表されている行為・出来事を現実の世界から切り離して取り出す作用がある, ということができる。連続した時間の流れの中に位置づけられるはずの一連の行為・出来事は「トイウ」によって修飾部に現れた部分だけが意図的に取り出され, 概念の世界 (= 命題) として, いわば “カプセル” の中に押し込められることになる。この “カプセル” に相当するのが「トイウ」であり, そのカプセルに付けられた “名札” が被修飾名詞であるということが出来る⁽⁷⁾。このような作用を生じさせる機能を, 「トイウの抽出機能」と呼ぶことにする。

2.2. 同時性に関する制約

「トイウ」を伴う名詞修飾構造では修飾部に表された事象を時間の流れから切り離して提示する。そのため, 「トイウ」を介在させることができない場合がいくつか出てくる。ここでは, 「感覚の名詞」, 「内の関係」⁽⁸⁾ の名詞修飾について見ていくこととする。

2.2.1. 「感覚の名詞」の名詞修飾(1)

まず, 知覚を表す名詞が被修飾語となっている名詞修飾について考えてみよう。

(16) [雨が降る] 音

この場合, 修飾部で表された具体的現象を認知するのと「音」を知覚するのは同時的である。この同時性は, 修飾部が非完了の継続を表す(17)のような場合は容認されるのに, 事態の完了を表す修飾部をもつ(18)は容認されないという事実によって確かめられる。

(17) [雨が降っている] 音

(18) * [雨が 降った／降っていた] 音

(17)において「音」を知覚する‘時’は「雨が降っている」時間に含まれ、(16)の場合と同様、同時性が観察される。一見反例であるかのように見える(19)も、実は、‘同時性’は保たれている。

(19) $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 魚が焦げる} \\ \text{b. 魚が焦げている} \\ \text{c. 魚が焦げた} \end{array} \right\}$ においがする。

(19a,b)については(16)～(17)と平行的に同時性が観察される。(19c)の場合は、‘魚が焦げた’時に必然的結果としてもたらされる状態は‘しばらくの間においが漂う’というものであり、その言語外的事実に基づけば二つの事象は共通の‘時’を持っていることになる。

(19)において修飾部は「魚がこげる／ている／た」ことだけを具体的現象から切り離して「におい」の説明にしているのではなく、「魚を焼いていたところ、時間をかけすぎて焦げたために、煙が出、においが発生する状態になっている」というような一連の現象を代表しているのである⁽⁹⁾。このように修飾部と非修飾名詞との同時性があることは、一連の事象から修飾部の内容だけを時間の流れから切り離す「トイウ」の抽出機能と相反するものである。以上の議論から予想されるように、「トイウ」を介在させた(20)は容認されない。

(20)* $\left\{ \begin{array}{l} \text{a. 魚が焦げる} \\ \text{b. 魚が焦げている} \\ \text{c. 魚が焦げた} \end{array} \right\}$ というにおいがする。

2.2.2. 「内の関係」の名詞修飾

いわゆる「内の関係」の名詞修飾には「トイウ」は用いられない。

- (21) a. [きのう私買った] ϕ /*という 本
b. [私が卒業した] ϕ /*という 大学

このことは、被修飾名詞が固有名詞で修飾部被修飾語についての説明になって

いる次のような場合⁽¹⁰⁾も同様である

- (22) a. [人を殺したことがない] ϕ / $*$ という 祖父
b. [鹿児島出身で漢学者だった] ϕ / $*$ という 祖父

これらの名詞修飾では非修飾語の認知は修飾部とは関わりなく行なわれている。たとえば、(21a) では「本」というものを認識するのは「きのう私買った」という部分の理解と同時的であるといえる。言い替えれば、「本」は一定の時に行なわれた一つの行為の構成要素として理解されるのである。これは、(21a) の名詞句が (21a)' の構造で示されるということとも一致する。

(21a)' [私がきのう本を買った] 本
↓
 ϕ

修飾部の内容を理解した後、その事柄に対して名前を与えるという「修飾部の理解→命名」型の心理的・解釈的プロセスは含まれない。話者は「本」という物を時間の流れの中に位置づけられている行為に組みこませ、その行為に直接関与しているものとして表現しているのである。そのため、内の関係の名詞修飾では「トイウ」が介在しない。

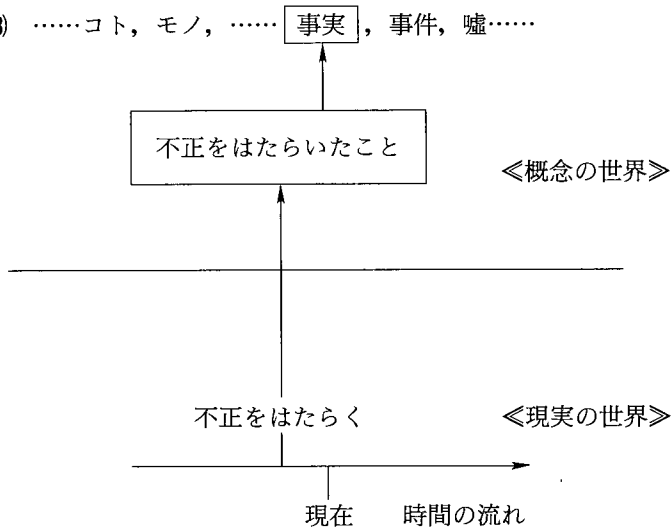
2.3. 「トイウ」の間接性

先に見たとおり「内の関係」の名詞修飾では修飾部と非修飾語の関係が直接的であるのに対して、「トイウ」が介在する「外の関係」⁽¹¹⁾の名詞修飾は両者の関係が間接的である。

(2.1) で述べたように、「トイウ」は現実の世界から修飾部に表された部分だけを切り離して取り出すカプセルのようなもので、そうして取り出された命題を含むカプセルにつけられた‘名札’あるいは‘ラベル’に相当するのが非修飾語の名詞である。このことを(22)の下線部の名詞句を例に図式的に表すと、(23)のようになる。

- (22) 彼は、不正をはたらいたという事実を隠していた。

(23) ……コト, モノ, …… 事実, 事件, 嘘……



被修飾語となる名詞 (=ラベル) の選択は命題の内容を話者がどのように理解するかによって左右される。(23)の図の上向きの矢印で表されるような二段構えの精神的プロセスがあるために、(22)のような名詞句では修飾部と被修飾語の認知は同時的ではなく、また両者の結びつきが間接的であるということができ

る。
 以上述べたことから分かるように、名詞修飾において「トイウ」が介在するための条件は、1) 修飾部と被修飾語の認知の非同時性、2) 修飾部と非修飾語の間接性という二点に求められる⁽¹²⁾。これをまとめると(24)のようになる。

(24)	修飾部と被修飾語の関係	修飾部の内容	「トイウ」の有無
	同時的・直接的	具体的現象	無し
	非同時的・間接的	抽象的概念	有り

2.3.1. 「感覚の名詞」の名詞修飾(2)

感覚の名詞の名詞修飾は(2.2.1)で見たように一般には「トイウ」を伴わないが、(24)の一般化を用いると(25)のような特殊な文についても説明することができる。

- (25) a. 誰かが金槌でブロック塀でも叩いているという音が聞こえた
b. これは、ご飯でも焦げているというにおいだ。

(Terakura 1984, p.24)

- c. 誰かがドアの外に立っているという気配がした。

たとえば、(25a)では、「ブロック塀を叩いている」という具体的事象を認知すると同時にその事象に付随する「音」を知覚しているのではない(同時性の不在)。話者は、まず何物であるかは分からない「音」を聞き、その音の性質と自分の経験から「金槌でブロック塀を叩くときに発生するであろう音」を想像し、その音であれば実際に聞こえた音と同じものであると考えてもよいだろう、と判断しているのである。この場合、実際に「ブロック塀を叩いている」という行為が行なわれているかどうかは問題ではない。定かではない、という気持ちは、副詞「デモ」に反映されている。このような精神的プロセスが介在しているために、修飾部と非修飾語とは間接的な関係を持つことになる(間接性の存在)。したがって、「トイウ」が要求されるのである。(25b, c)についても同様である。

2.3.2. 「相対性の名詞」の名詞修飾

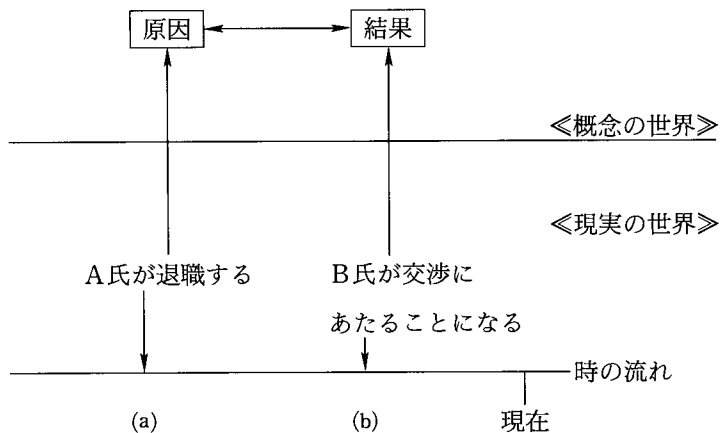
「相対性の名詞」とは「原因—結果」等のように対概念をもつ名詞が存在する名詞で、その名詞修飾には通例「トイウ」を伴わない。

(26) A氏が退職した ϕ 結果, B氏が取引先との交渉にあたることになった。このような名詞修飾は一見(24)の一般化に反するものであるように思われるかもしれない。なぜなら、修飾部で表された事象と被修飾語が表す概念は別々に認

知され(非同時性), それらの間に相対的な関係が成り立つと判断する精神的なプロセスが入り込んでいる(間接性), といえるからである。しかし, (26)の例はこれまでの議論の妥当性を裏付けるものであって, 決して否定するものではない。

(26)の解釈を(24)に倣って図式化してみる。

(27)



図の(a), (b)は, それぞれ「A氏が退職したとき」, 「B氏が交渉にあたることになったとき」を示している。二つの出来事が時の流れの中に位置づけられており, (a), (b)の順序が入れ替わることは決してない。つまり, 「原因—結果」という時, 原因が結果に先行するという時間的位置づけが語彙の性質から決定づけられているのである。「トイウ」の抽出機能は, 修飾部に示された事態を時の位置づけから解き, その事態に関連した一連の事柄から切り離すというものであった。(27)において, (a)と(b)の相対的な時の位置が固定されていることは, この「トイウ」の抽出機能と矛盾するものである。したがって, (26)には「トイウ」の介在が許されないのである。

3. 「トイウ」のない内容補充の名詞修飾

既に論じたように、「トイウ」の介在は具体的な現実の事象からある部分を抽出するという精神的プロセスがあることを意味している。逆に言えば、事態の一部分を抽出する過程をふまず、一連の出来事を全体として直截的にとらえる場合、つまり抽出作用を必要としない場合は、たとえ被修飾語が修飾部の‘ラベル’としての役割を果たしているときでも「トイウ」は要求されないということになる。

その典型的な例は新聞などの事件の報道に散見される。事件の報道では、その事態の全容を伝えることが意図されている性質上、以下の例で「トイウ」が用いられていないのは「トイウ」の抽出機能から方向付けられた十分予測可能なことであるといえる。

(28) 二十六日未明、深夜ドライブ中の少年ら六人を乗せた自動車が暴走、死者を出した事故は、無謀運転が原因だった。

(29) 駅前の私道でAさんら四人が鉄棒などで争った事件で、……。

また、全体の話の流れを意識した出版物の紹介 (30) や、被修飾語が漠然とした事態を示す名詞である場合 (31) でも、「トイウ」を伴わない傾向が観察される。

(30) a. 「破獄」は、主人公が、刑務所を四回も脱獄し闘争を繰り返した話である。

b. 「高野長英」は、高野長英が小伝馬町の牢を脱獄後、幕府の追求をかわしながら逃亡を続ける話だ。

(31) a. 両氏については、証言するに至った経過について尋問してい、と語った。

b. 乗客二人が病気を理由に解放された模様だ。

c. 「……それに、クレジットの方が親元にも買い物の内容が分かりやすい」と大学生協連では“今様”の学生生活を認めざるを得ない口ぶ

りだ。

さらに「トイウ」は、その抽出機能のため、時に、修飾部で表された内容を取り立て、強調する役目を果たすることがある。(32)はその例である。

- (32) ……モジュール化が進むほど、一つのモジュールに関する変異形の多様性は少なくなってくる。これは文法が簡単になることを意味する。文法が簡単になるということは、文法の習得、すなわち言語の習得がそれだけ簡単になるということになり、……

4. モダリティ要素のある修飾部

修飾部にモダリティ要素、つまり、話者の心的態度を表す要素が入っているとき、「トイウ」は義務的に現れる。

- (33) a. 年末・年始にかけて、犯人が犯行をエスカレートさせるのではないかという恐れがある。
b. これから名古屋で暮らそうという意志がある。

「カ」、「ソウ」で表された話者の心的態度の表明は修飾部の叙述内容にたいしてのみ行われたものであって、叙述された事柄に関連した様々な事柄や事態に対しては、何の表明も行っていない。もし、表明された話者の心的態度に対する名付けを行う過程で、「トイウ」不在による事態の相対的理解が行われることになれば、修飾部に表された話者の心的態度が他の行為や事態にも及ぶことになってしまう。何に対する心的態度を表しているのかを明らかにし、その態度に対する正確な名付けを行うために「トイウ」が要求されるのではないかと、と思われるが、この点に関してはさらに研究する必要があると思われる。

5. まとめ

名詞修飾に現れる「トイウ」は、従来、内容補充の名詞修飾については任意の要素であるとされてきた。本稿では、「トイウ」は補文標識であるという戸村(1990)の主張に基づきながら、「トイウ」がもつ意味的機能について述べ、「ト

イウ」の有無によって文の表す意味に違いが生じるということを論じた。

「トイウ」の基本的な機能は、ここで「抽出機能」と呼んだもので、修飾部で表された事態をそれに関連する出来事・事態から完全に切り離し、時の概念から切り離す作用を担っている。この性質により、「トイウ」を伴う名詞修飾では、修飾部の認知と被修飾語の認知が同時的ではなく、両者のつながりは心理的・精神的プロセスを介した間接的なものであることを主張した。

本稿での考察は、意味と形は一對一の対応をもつという Bolinger (1977) で主張されている原理の裏付けの一つである。修飾部にモダリティ要素が含まれる場合になぜ「トイウ」が義務的に現れるか、等、解明しきれていない点も残されているが、それらは今後の課題としたい。

注

- (1) 戸村 (1990)
- (2) cf. Volinger (1977) *Meaning and Form*
- (3) “. . . this complementizer has inherent meaning that is essentially non-factive.” (Josephs 1976, p.359)
- (4) “. . . to you connotes some degree of doubt on the part of the speaker.” (Ibid, p. 356)
- (5) この用語は寺村 (1975) による
- (6) (10), (11)の二つの構造を導く句構造規則として、井上 (1976) は次の規則を挙げている。
 - (i) NP → S' (N)
 - (ii) S' → S COMP(i)の段階で NP → S'をとれば (10) が派生し、N → S'Nをとれば (11) が派生する。
- (7) ここで見ているような名詞修飾では被修飾語と修飾部との間に同格の関係がある、とする議論があるが、これは正しくない。典型的な同格関係にある(i)には(i)'で示されるような関係が成り立つが(ii)の名詞修飾にはそれに対応する(ii)'のような関係はなりたないからである。
 - (i) 日本の首都の東京
 - (i)' 「日本の首都」 ⇔ 「東京」
 - (ii) 罪を犯したという事実
 - (ii)' 「罪を犯したこと」 ⇔ 「事実」
- (8) これらの名称は寺村 (1975) による。
- (9) 従来の研究では、感覚の名詞の名詞修飾は「内容補充」の名詞修飾の特殊な場合であるとされてきたが、ここでの議論に基づけば修飾部と被修飾名詞との間には「原因—結果」の関係に近いものがあるように思われる。その意味的つながりには白川 (1984) が「疑似相対名詞の連体修飾」として議論している次のような名詞句と共通するものがあ

ると言えるかもしれない。

- (i) [木の風呂桶を追いだした] あと
 - (ii) [墓を掘った] たたり
 - (iii) [パンツを燃やした] 熱
- (10) 「被修飾語についての説明」という点では外の関係の「内容補充の名詞修飾」と共通しているが、修飾部に被修飾語と同一指示の名詞を還元できるという統語的な見地から、内容補充の名詞修飾とは区別される。
- (i) [私が人を殺したことがない] 私
→ ϕ
 - (ii) [祖父が鹿児島出身で漢学者だった] 祖父
→ ϕ
- (11) この用語も寺村 (1975) による。
- (12) ある要素が介在することが意味的にもそれに前後する要素の間接性と関係があるということとは英語においても指摘されている。たとえば、
- (i) I know the restaurant.
 - (ii) I know of the restaurant.
- を比較すると、(i)は直接そのレストランに行ったことがあって知っている、という意味であるのに対して、(ii)はそのレストランについての情報を人から伝え聞いて間接的にその存在を知っている、という含みがある。
- 補文標識の介在についても同様に間接性との関わりが指摘されている。
- (iii) Did you know you have a flat?
 - (iv) Did you know that you have a flat?
- (iii)はパンクを見つけた時点でそれを指摘する時に用いられるが、(iv)は発話以前のある時点でパンクを見つけていたのに、後になって指摘するというような状況で用いられるという。発話時に先行する別の時点での出来事を間接的に文に組み入れる、という意味で補文標識の間接性を示すものであるといえる。

参考文献

- 奥津敬一郎 (1976) 『生成日本語文法論』 大修館書店
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』 大修館書店
- 斉藤武生, 安井泉 (1983) 『名詞・代名詞』(講座・学校文法の基礎 第2巻) 研究社出版
- 佐久間鼎 (1957) 「修飾の機能」『日本文法講座』5. 明治書院
- 白川博之 (1984) 「指示連体詞‘その’と‘相対性’の名詞」未刊論文
- 寺村秀夫 (1971) 「‘タ’の意味と機能」『言語学と日本語問題』岩倉具実教授退官記念論文集
出版講演会編 くろしお出版
- (1975-78) 「連体修飾のシンタクスと意味(1)~(4)」『日本語・日本文化』4~7.
大阪外国語大学留学生別科
- (1982, 84) 『日本語のシンタクスと意味 I, II』くろしお出版
- 戸村佳代 (1990) 「名詞修飾における「トイウ」の機能(1)―統語的位置づけ―」『明治大学教養論集』232号 pp.443-452 明治大学
- 中右実 (1973) 「日本語における名詞修飾構造」『言語』2:2, pp.27-36.
- 三上章 (1975) 「連体と連用」『三上章論文集』くろしお出版
- 安井泉 (1980) 「英語の be 動詞の多義性―四つの be 動詞の等質性と異質性」『英語学』

23. pp.40—67.

—— (1981) 「補文化子 that の出沒」『現代の英語学』安井稔博士還暦記念論文集編集委員会編 開拓社

Bolinger, Dweight (1977) *Meaning and Form*. Longman, London

Josephs, Lewis (1976) “Complementation” in Shibatani, M. (ed.) *Syntax and Semantics Vol.5, Japanese Generative Grammar*. Academic Press

Nakau, Minoru (1973) *Sentential Complementation in Japanese*. Kaitakusha.

Terakura, Hideko (1980) *Some Aspects of Complementation in Japanese: A Study of ‘to yuu’*. Ph.D. dissertation, University of Wisconsin-Madison.